

## 《資料紹介》

## 大阪市立大学学舎接收時代史料群

田 中 ひとみ

大阪市立大学の前身校である大阪商科大学は日本の敗戦後、占領軍によって学舎を接收された。これは、戦時中に大阪商科大学が日本海軍の大阪海兵団に学舎を接收されていたため、軍用に提供していた施設とみなされたゆえのことであった<sup>(1)</sup>。1945年10月から始まった接收は途中、一部返還（1952年8月）が成ったものの、1955年9月の全面返還まで足掛け10年に及ぶものであった。

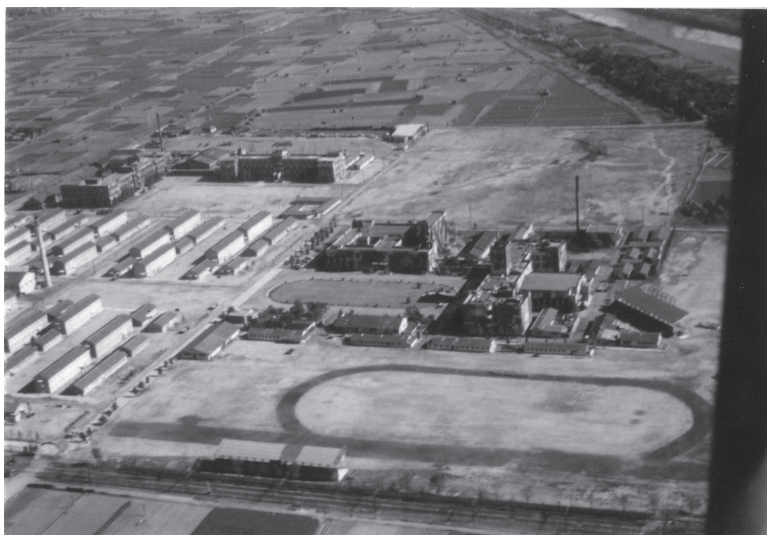
この間に大阪商科大学は1949年、大阪市立都島工業専門学校、大阪市立女子専門学校とともに大阪市立大学となり、新制大学としての歩みを始めた。さらに1955年4月には大阪市立医科大学が大阪市立大学医学部となり、現在の本学に至る基本的な枠組みが固まった。新制大学としての基礎を確立していく重要な時期に、本拠地となるべき杉本町の学舎を接收により奪われ、各学部が市内各地の小学校での仮住まいを強いられるという困難を抱えていたのである。

今回紹介する史料は、いずれも上記の接收時代に生成されたものである（1～5：大学史資料室、6・7：恒藤記念室所蔵）。各々の史料は、これまでも『大学史資料室ニュース』などで折にふれ公表されてきたが、同時代のものとして一括りに紹介されたことはなかった。そんななか2013年7月、本学の博物館学芸員養成課程科目「博物館実習Ⅰ」の一環で履修生が大学史資料室へ見学に来た際、「占領期の大阪市立大学」をテーマに複数の史料をまとめて紹介した。これを機に本紀要に記録を掲載し、占領期すなわち新制大学開始前後の本学の歴史を振り返るよすがとしたい。

## 1 米軍接收時代の航空写真（1947～48年頃）

接收中の本学は、占領軍の「キャンプ・サカイ」となった。ここに紹介するのはキャンプ・サカイの兵士であったベンジャミン・A・シルバー氏の関連資料である。シルバー氏はシングル・エンジンの飛行機を操縦するパイロットであり、敗戦後の日本にやってきて浜寺公園内に妻子とともに在住、そこから車でキャンプ・サカイに勤務していた（当時、浜寺公園近辺の住宅街は占領軍に接收され、駐留米軍兵が居住していた。）この写真史料は、1997年にシルバー氏の知人である本学職員（当時、松村彦治主査）を経由して大学史資料室に寄贈されたものである。のちにシルバー氏は妻を伴い2002年に資料室に来室している。

(1) 拙稿「占領軍による大阪市有不動産の接收—大阪商科大学等のミリタリー・ターゲット指定問題を中心として—」（『大阪市立大学史紀要』第1号、大阪市立大学大学史資料室発行、2008年）



(写真1) 1947年頃の大阪商科大学（現・大阪市立大学）



図1

寄贈された3枚の写真は1947～1948（昭和22～23）年頃に撮影され、このうち2枚は本学（キャンプ・サカイ）の航空写真、残る1枚はシルバー氏のポートレートである。撮影時期は本学が新制大阪市立大学になる前の、大阪商科大学時代にあたる。

（写真1）は、本学を西方向上空より撮影したものである。手前にはトラックを含む本館（1号館）地区、その左奥には旧教養地区が写っている（図1参照）。現在の理工系地区にあたる場所（本館地区の北側、旧教養地区の西側）には、東西方向に何列もの兵舎が立ち並んでいる。また、このときに米軍のチャペルも既に建てられていることが見て取れる。チャペルは高原記念館建設のために2005年に解体撤去されるまで、60年近くこの地に立っていたことになる。



(写真2) キャンプ・サカイ (大阪商科大学) 駐留中のシルバー氏

(写真2) はシルバー氏のポートレートである。軍服・軍帽姿のシルバー氏は旧教養地区の中庭に立っている。背景は右手に2号館 (大阪商科大学時代は予科校舎)、左手に3号館 (同・高等商業部校舎。3号館は現在、全学共通教育棟に建て替わっている) があり、シルバー氏の頭部後方には第一体育館と暖房汽罐室の煙突が写っている。本誌掲載写真はサイズが小さくやや分かりづらいが、シルバー氏後方の建物は2号館・3号館・第一体育館のいずれも外壁一面が迷彩柄などに塗り替えられている<sup>(2)</sup>。のちに朝鮮戦争が始まるとこのキャンプは軍事病院に転用されるが、病院時代の2号館・3号館・第一体育館の写真にはこのような壁面の柄はみられない (写真5・6参照)。この時期に限られた風景として貴重な1コマである。

## 2 米兵が使用した水筒 (1943～45年製)

2010年8月、本学2号館の天井裏から銃の実弾とアルミ製の水筒 (写真3) が発見された。本学複合先端研究機構の仮研究室設置工事のため、2号館3階各教室の吹きつけをやり直していた際のことである。実弾はライフル銃のものが8発、ピストルのものが10発見つかり、本学からの連絡で住吉警察署へ引き渡しされた。かつて3号館解体工事の際に日本軍使用のライフル銃が見つかったこともある。3号館のライフル銃は戦時中の大阪海兵団による接収時代のものであろう<sup>(3)</sup>。

(2) ちなみに、本館地区の建物内部については、時期はやや下るが『大阪市大新聞』第34号 (1952年9月25日付) に、「一步校舎に足を踏み入るとコパルトブルーと茶色に一面にぬりかえた壁の横文字が接収校舎の今までの状態と植民地色を我々に感じさせる。」と部分的に返還された当時の様子を伝えている。

(3) 今回の実弾は日米どちらのものか不明である。



(写真3) 2号館から発見された米軍の水筒

水筒は7点見つかった。いずれも底面もしくは側面に刻印があり、製造社と製造年が記されている。刻印を以下に挙げておく。(□および( )は判読不明部分。)

“U.S. G.P.& F.CO 1943” 1点

“U.S. G.P.& F.CO □94□” 1点

“U.S. VOLLRATH 1944” 1点

“U.S. VOLLRATH 1945” 2点

“U.S. A.G.M.CO 1945” 1点

“U.S. ( ) M.CO ” 1点 (年不詳)

上記刻印から1943年から45年にかけて製造された水筒であると判明する。水筒本体とフタはチェーンでつながっているが、中にはチェーンが切れているものやフタのなくなったものが含まれている。天井裏に隠す必要のあった水筒とは、中身が何だったのか興味をそそられるところである。まもなく戦後70年になろうとしているが、いまだに発見されるこれらの軍用品は学舎接収の歴史を物語る遺物である。

### 3 米軍の病院として使われていた時代の写真(1952年)

1950年に朝鮮戦争が勃発し、キャンプ・サカイは軍事病院(279TH GENERAL HOSPITAL)に転用されることになった(写真4)。



(写真4) 米軍の軍事病院時代の杉本町



(写真5～7)は、1952年に撮影され、病院時代の様子が写っている。写真提供者は、1952(昭和27)年10月28日～12月22日の間、入院していた元・米兵のアル・スターチオ(Al Sturchio)氏である。スターチオ氏は若き日の思い出の地をぜひもう一度訪れたいという希望を持っており、2001年に仕事で来日した際、領事館など各所に問い合わせた末にキャンプ・サカイであった本学を探し当て、来学を果たした。スターチオ氏の来学時、大学史資料室は直接お話をうかがっている<sup>(4)</sup>。

当時のキャンプ・サカイは傷病兵を収容し、また戦死した米兵の遺体をドライアイス詰めにして本国に送還する中継地となっていた。スターチオ氏は戦地で負傷したため韓国から伊丹へ飛行機で運ばれ、伊丹で振り分けられて杉本町のキャンプ・サカイへバスで搬送された。旧教養地区にあった平屋の建物(現在の学生食堂のある場所あたりに建っていた)の中に受付があり、そこで受付を済ませた後、病室に運ばれた。病室は現在の2号館・3号館(当時)にあり、一部屋に16人収容されていた。スターチオ氏は3号館の病室に入っていた。(写真5)は3号館前にて撮られたもので、中央がスターチオ氏である。スターチオ氏を含む3患者の後ろには、3号館の特長である玄関口の庇と車寄せが写っている。また、(写真6)は後方左手が第一体育館、右手は2号館である。氏によれば第一体育館はこの当時、病院の食堂として使われていたという。



(写真5) 入院中の米兵たち(旧3号館前にて)



(写真6) 入院中の米兵(中央)  
(第1体育館・2号館前にて)

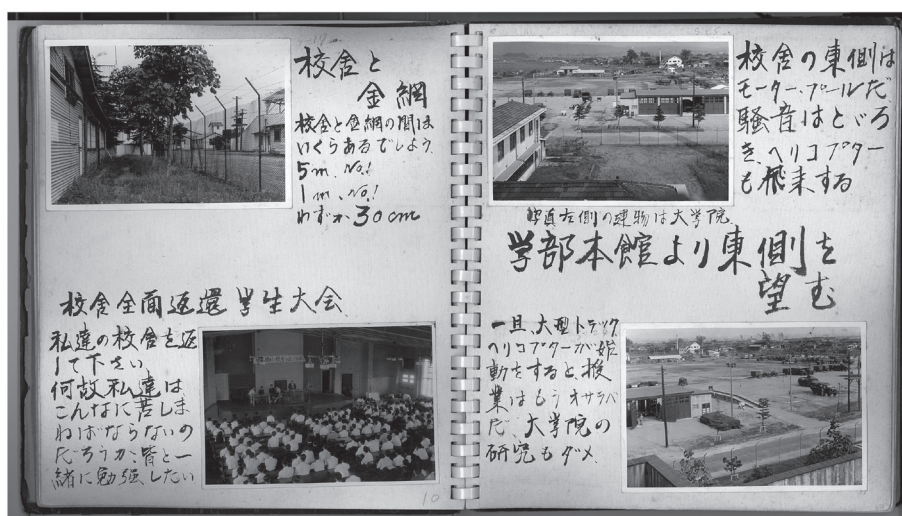


(写真7) 軍事病院の日本人看護婦

(4) 『大学史資料室ニュース』第6号(大阪市立大学大学史資料室発行、2001年12月)を参照。

スターチオ氏のケガは重傷でなかったため、入院期間中に車で5～6分行ったところにあった将校専用のクラブや、歌舞伎の見物にも出掛けたとのこと。(写真5)や(写真6)の人物は皆にこやかで、戦地を離れ緊張感から解放された雰囲気が漂っている。同じキャンプ内に、遺体となった兵士が運ばれているとは思えないほどである。また、医師・看護婦の中にわずかに日本人がおり、日本人看護婦は特に親切で、それ以来親日家になったとも証言している。(写真7)はそのときの日本人看護婦である。占領軍の病院内で働く日本人を写した貴重な写真である。

#### 4 杉本町校舎全面返還運動の写真帳（1954年）



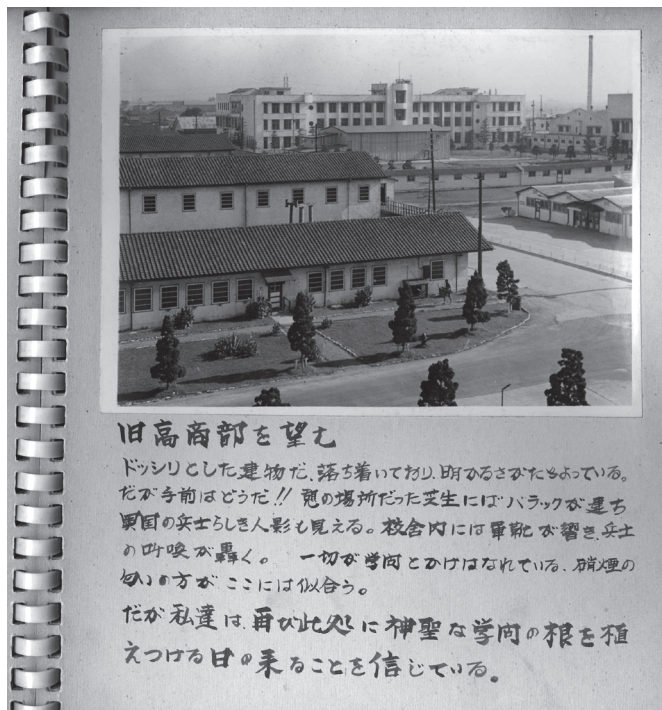
(写真8) 校舎返還運動の写真帳（写真帳②）

この写真帳は2冊あり、ベージュ色と赤色の各一冊ずつとなっている（ここでは仮にベージュ色を写真帳①、赤色を写真帳②とする）。接収中の学舎のモノクロ写真が貼り付けられており、各写真には筆書きのコメントが付いている。写真帳①には2L版に近い120×161mmの写真10点、写真帳②には①よりも小さめの79×114mmの写真58点が収められている。①の10点は、いずれも②の中に同じカットがある。②の中から10点を選び大きく伸ばして再録したものが①であろう。

①の表紙見返しには「編集期間 昭和二十九年八月十七日より同年八月二十四日迄」とある。また、裏表紙の見返しには「編集責任／大阪市立大学杉本町校舎全面返還促進教職員実行委員会／大阪市立大学杉本町校舎全面返還促進学生実行委員会」と、ふたつの実行委員会の名が記されている。

ふたつの委員会が結成されたのは、1954（昭和29）年7月頃のことだ。この時期、返還運

動の熱は高まっていた。一年前にあたる1953(昭和28)年7月、朝鮮戦争は休戦協定をもって終了した。米軍は朝鮮戦争傷病兵のための軍事病院としてキャンプ・サカイ(=本学)を使っていたので、戦争の終了は学舎全面返還の契機となるはずだった。1954(昭和29)年初頭に病院は閉鎖されたが、それまで“279 General Hospital”と表示のあった看板は3月末には“US Army”と書き換えられ、6月には新たに米・海兵隊が杉本町へ移駐してきたのだった。しかしこの間の経緯について市および大学に公式の連絡がなかったため、教職員の間にも杉本町校舎全面返還促進の機運が急速に高まった。このような機運の中で同年7月3日、商・経・法・文・理工・家政各学部、経済研究所、事務職員より選出された実行委員の会合が行われ、「杉本町校舎全面返還促進実行委員会」(教職員)が結成された。学生も教職員の実行委員会結成に先んじて各校舎ごとに実行委員会を結成し、7月5日には中之島中央公会堂に千数百名の学生を集めて杉本町校舎全面返還全学決起大会をひらき、7月10日には市中デモを行った<sup>(5)</sup>。



(写真9) 「旧高商部を望む」旧教養地区に兵舎が立ち並ぶ様子(写真帳①)

写真帳の編集期間は1954年8月であるから、6月の海兵隊移駐、7月の委員会結成を受けて、まさに返還運動が盛り上がっている渦中で作成されたことになる。2004年1月、この写真の

(5) 『大阪市立大学百年史』全学編上巻、本史第1章第4節杉本町校舎返還運動参照(大阪市立大学発行、1987年)。

撮影者である葛野<sup>かどの</sup>豊氏（昭和32年文学部卒）が大学史資料室に来室され、ご自身が撮影者であること、編集は池田克彦氏（昭和33年文学部卒）が行ったことを証言された。葛野氏によると、当時はまだ高価だったカメラで、占領軍に見つからないようにと留意しながら撮影した、とのことである。

写真帳に筆書きされたコメントを再現してみると、

「旧高商部を望む／ドッシリとした建物だ。落ち着いており、明かるさがたまよっている。だが手前はどうか！！憩の場所だった芝生にはバラックが建ち異国の兵士らしき人影も見える。校舎内には軍靴が響き、兵士の叫喚が轟く。一切が学問とかけはなれている。硝煙の匂いの方がここには似合う。／だが私たちは再び此处に神聖な学問の根を植えつける日の来ることを信じている。」

また、他のページには

「兵舎の中の大学 大阪市立大学杉本町校舎（旧大阪商大）

号令が響き、カービン銃が光る。こゝキャンプ堺のゲートの守りは厳しい。その横を学生がカバンを下げて通学する。／何だいこれは。向って右は大阪市立大学杉本町校舎正門、左は米軍のゲートである。トラック、ジープが走り、学生を圧するかの如くMPが立っている。（後略）」とあり、学舎を占領されている憤りや何としても取り戻すのだとの強い意思が伝わってくる。

## 5 接収解除後の記録写真帳（1955～58年頃）

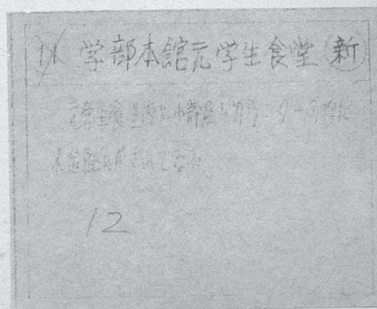
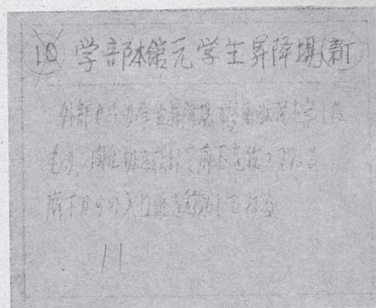
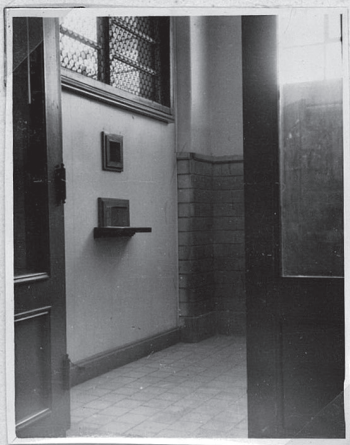
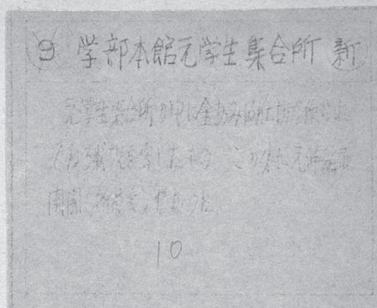
1955（昭和30）年9月、ようやく本学の接収全面解除が実現した。2013年11月、本学1号館の地下書庫から発見され、同年12月に経営管理課から大学史資料室に移管された都合3冊の写真帳は、接収解除後の様子を記録する目的で作成されたものだ。3冊はいずれもスクラップブックに写真を貼り付けたものであり、このうち2冊は同じ様式のスクラップブックである。2冊とも写真脇に鉛筆で簡単な説明が書かれている。

残りの1冊は、写真とともに学内平面図が貼りこまれ、そこには撮影地点と角度が赤ペンで記録されている。撮影地点に付された番号に対応したキャプションは、ガリ版刷りで統一された様式で記されている（写真10）。同じ建物の接収前と接収解除後の姿を比較した写真もある（写真11）。平面図や印刷されたキャプションから、上記2冊のスクラップブックよりも公的記録の性格が強いと考えられる。ただし、キャプションが写真の脇に貼り付けられているのは一部のみで、大半が糊付けされずにただ挟み込まただけの状態である。編集途中で未完成のままだったのか、或いは正本の元となった試作アルバムだったのではないだろうか。3冊とも正確な編集期日は不明だが<sup>(6)</sup>、このようにまとまった形で接収解除後の写真が残存するのは大変貴重で今後も大学史資料室において大切に保管していきたい。

---

(6) ごく一部には「33.6.21」という撮影日の記載が見受けられる。





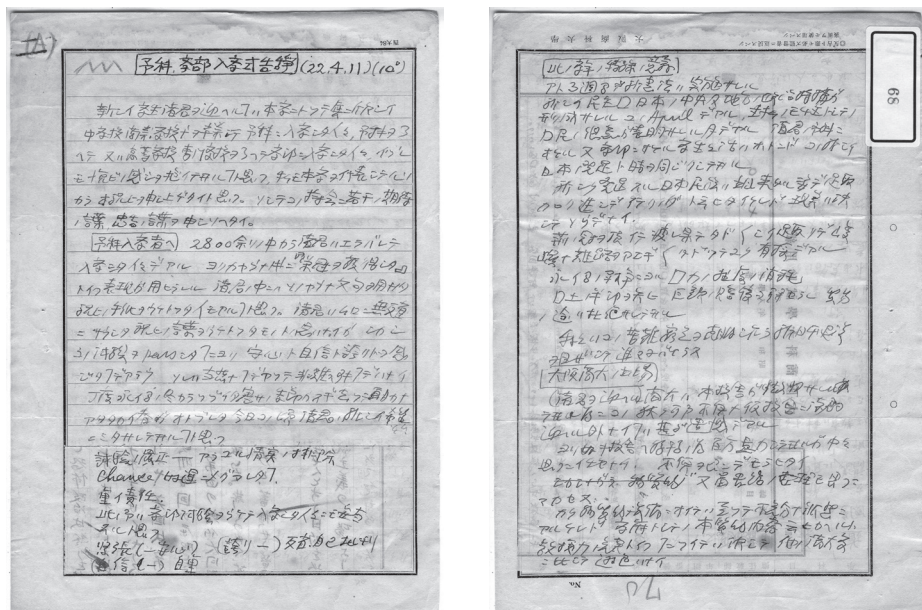
(写真 10) 建物内の改造の様子



(写真 11) 旧経済研究所棟 (上) 竣工当初 (下) 接收解除時

## 6 学長・恒藤恭の式辞レジュメ (1947 年)

学舎接収時代に学長の任にあったのは、恒藤恭である。恒藤は戦後、1946～1957 年にかけて旧制大阪商科大学・新制大阪市立大学の学長であった。本学は恒藤家のご子孫から数次にわたり恒藤恭関係資料の寄贈を受け、恒藤記念室にて保存・管理・公開に努めている。恒藤記念室・大学史資料室が 2011 年から刊行中の『恒藤記念室叢書』では、シリーズ第 3 巻にて学



(写真 12) 恒藤恭 式辞レジュメ 1947 年 4 月 11 日

長時代の式辞レジュメを翻刻、掲載した<sup>(7)</sup>。このうち、1947（昭和 22）年 4 月 11 日大阪商科大学の学部・予科入学式式辞で学長は当時の大学について以下のように述べている。

「大阪商大ノ立場

（諸君ヲ迎ヘル）商大ハ本校舎ガ徴収サレテキル為ニ、コノ狭ク万事不便ナ仮校舎ニ諸君ヲ迎ヘル外ナイコトハ甚ダ遺憾デアル。／ヨリ好キ校舎ヘ移転ノ為、百方尽力シテキルガ中々思フニ任セナイ。不便ヲ忍ンデモラヒタイ。／又図書館ノ整理モ思フニマカセヌ。／カク物質的設備ニオイテハ至ツテ不十分ナ状態ニアルケレド、学府トシテノ本質的内容、云ヒカヘルト教授力ノ充実トイフコトニツイテハ決シテ他ノ諸大学ニ比シテ遜色ハナイ」<sup>(8)</sup>

接収による仮校舎暮らしの不便を詫び、せめてもより良い校舎へと移転に尽力していることを伝え、施設面では不十分だが大学の本質である教授力の充実については自負があると述べている。恒藤学長の式辞レジュメは 1947（昭和 22）年から 1957（昭和 32）年まで残存しており、接収時代の渦中で学長がどのようなことを学生らに伝えようとしたかがい知れる史料である。

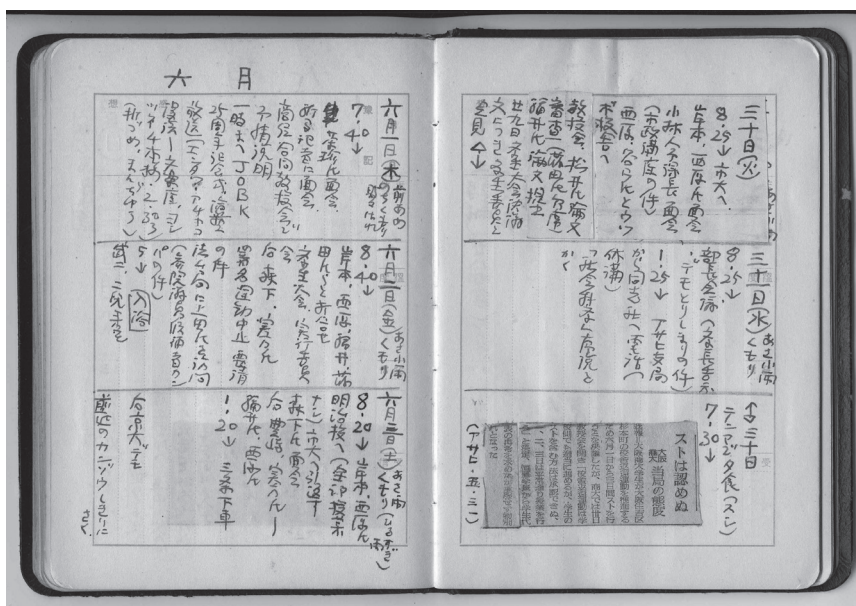
このレジュメ（写真 12）は使用済み的大阪商科大学の定期試験用紙に、上から紙を貼って式辞レジュメに転用したもので、物資不足の時代を感じさせる。

(7) 『恒藤記念室叢書 3 恒藤恭「欧州留学日記」(1924 年) 恒藤恭学長式辞集』(本学恒藤記念室編、大学史資料室発行、2013 年 3 月)

(8) 句読点を筆者が適宜補った。



7 恒藤恭 手帳 1950 (昭和 25) 年



(写真 13) 恒藤恭 手帳 1950 年

6 と同じく恒藤の手による史料である。本学恒藤記念室では 1903 (明治 36) 年から 1957 (昭和 32) 年まで、ほぼ毎年分の恒藤の手帳を所蔵している。学長在任期間である 1946 年～1957 年には、手帳に学長としての行動も記されている。学舎接収時代の日記について、ひとつの山場であった 1950 (昭和 25) 年 5 月末から 6 月初旬の記載に注目してみる。『大阪市立大学百年史』<sup>(9)</sup>によると、1950 年 5 月 29 日、商大・市大の学生は合同学生大会を開き、返還運動を強力に推進するため 6 月 1 日から 3 日間のストライキを決議した。第 1 日は街頭デモ、第 2 日は各学校や労働組合への行動隊の派遣、第 3 日は主要ターミナルで署名運動を行うことをきめた。これに対して商大では教授会を開き、「校舎返還運動は大学側としても支持するけれども、ストを含む方法は承認できない。6 月 1 日～3 日は平常通り授業を行う」と決定、恒藤学長から学生に再考を求めたが、学生側は承服せず、物別れとなった。

恒藤の手帳には 5 月 30 日の欄に「廿九日学生大会決議文につき学生委員と会見」と記載がある。そして同月 31 日と 6 月 1 日の間には 5 月 31 日付朝日新聞の切り抜きが貼られている。「ストは認めぬ 大阪商大当局の態度」という見出しで始まる小さな記事は、前掲百年史の叙述と同内容である。このほかに手帳には、「部長会議 (学長告示、デモとりしまりの件)」「アサヒ支局から同志社へ電話 (休講)」「(以上 5 月 31 日)」、「新聞記者に面会」「商経合同教授会で事情説明」(同 6 月 1 日)、「学生大会、実行委員会」「后 森下、実方氏 署名運動中止要請の件」(同

(9) 前掲『大阪市立大学百年史』全学編上巻同節参照。



6月2日)などの記述がみられ、過熱する返還運動に対応する学長の姿が浮かび上がってくる。以上のように学長時代の恒藤の手帳は、プライベートな内容にとどまらず大学史としての側面が含まれており、今後の大学史研究に資する貴重な史料である。

以上、学舎接収の時期に限定して大学史資料室・恒藤記念室所蔵史料の一部を簡単に紹介した。今後もこれらの史料群を大学史資料室・恒藤記念室において適切に管理し、新制大阪市立大学が創設期に被った占領の事実を史料に基づいて学内外に伝えていきたいと思う。

(たなか ひとみ・大阪市立大学恒藤記念室研究員)